

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284098

研究課題名(和文) 言語運用に対する個人の評価価値観の形成とその変容に関する研究

研究課題名(英文) Research on formation and transformation of individual's sense of values in evaluating linguistic performance

研究代表者

宇佐美 洋 (USAMI, Yo)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：40293245

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,200,000円

研究成果の概要(和文)：ひとはだれでも、日常生活の中で、他者や自己の言語運用に対し、独自の価値観に基づく評価を行いながら生きている。その価値観は人生におけるさまざまな経験によって形成され、また変化していくものである。

本研究では、(1)言語運用の評価における個人の価値観がどのようにして形成されていくのか、(2)どのような要因によってその価値観が変容しうるのかを、多様な質的手法に基づき明らかにし、その成果を学術書として刊行した。またそこで得られた知見も活用しつつ、自らの評価価値観の内省を目的とするワークショップ手法を複数開発し、それらを実践するシンポジウムを開催した。

研究成果の概要(英文)：In the daily life, any human beings evaluate the linguistic performance of themselves or the other people based on their own sense of values. The sense of values was formed or transformed in the process of various experiences in their lives.

Using various qualitative methods, the study investigated (1) the processes of forming the individuals' sense of values in evaluation, and (2) the factors that influence the transforming processes of the sense of values. The results were published as an academic book. The several workshops were also designed in order to have the participants reflect their own sense of values in evaluation, and the workshops were performed in a symposium which was held by authors of the book.

研究分野：日本語教育

キーワード：質的研究 ライフストーリー 内省 縦断研究 インターアクション教育 自己評価 ワークショップ

1. 研究開始当初の背景

現代社会とは、互いに異なる価値観を持つ人々同士が、自らが持つ価値観に基づき、お互いを評価しながら生活を営んでいく場である。ここで、他者、あるいは自分自身を評価する際に準拠する価値観のことを「評価価値観」と呼ぶこととする。

様々な評価価値観がぶつかり合う現代社会において、互いを尊重しつつ円滑な人間関係を築いていけるようになるためには、自らが持つ評価価値観のありようを自覚するとともに、他者の評価価値観との相違を知り、必要に応じて自らが持つ価値観を調整できるようにする、ということが求められる。

このような問題意識に基づき、本研究代表者はこれまで科研費（「学習者の日本語運用に対する日本人評価の類型化・モデル化に関する研究」、2010-2012年度、基盤B）により、日本語学習者の日本語運用を母語話者が評価する際に準拠する価値観や評価プロセスの多様性をとらえ、評価プロセスをモデルとして表現するという試みを行ってきた。

研究代表者のこれまでの評価研究は、評価が行われる状況を固定し、そこで行われる評価のあり方がいかに多様であるかということ個人間で比較する、というものであった。しかし、個人の評価価値観は常に不変という訳ではない。評価を取り巻く状況（例：評価者と非評価者の関係性・評価が行われる文脈等）によって、評価観点の優先順位が一時的に組み変わったり、人生における経験を積むことによって、新たな価値観が生まれたりするということも起こり得る。つまり、評価に関わる個々人の価値のあり方は、個人の内部においても変容しうる。こうした「価値観の形成と変容」に焦点を当てた研究は、これまで十分に行われてこなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下のとおりである。

- 個人が他者、あるいは自らの言語運用を評価する際の価値観がどのように形成されてきたか、またその価値観がどのように変容していくか、どのような要因によってそうした変容が行われたのか、等のことを、各種の質的手法によって探る。
- 評価価値観を内省し、問い直す実践の中で、参加者の内部にどのような変容を起こっていくかを分析する。
- 自らの評価価値観を内省し、問い直すことを目的とするワークショップ開催手法、あるいは教育実践の手法を新しく考案する。また、複数の「価値観内省のためのワークショップ」に参加できる催し（シンポジウム）を実施することにより、こうしたワークショップ実践の意義を社会に向けて広く伝えていく。

3. 研究の方法

(1) 縦断的調査

新しい環境に参画し、そこで新しい経験を積んでいくことが予想される人（具体的には、「ボランティアとしての日本語支援の仕事を始めただけの人」、「まずは留学生として来日し、その後日本の企業等に就職し、社会人としての生活を始めた人」等）に対し、数か月の期間を空けて縦断的なインタビューを行った。インタビューの結果は、特に「本人の価値観の変容」に焦点を当てて分析し、価値観の変容に対し、本人のどのような経験が影響を及ぼしていたかが検討された。分析においては SCAT（大谷 2011 等）等の手法が活用された。

大谷尚（2011）『SCAT: Steps for coding and theorization: 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法』『感性工学』10(3): 155-160. 日本感性工学会.

(2) 「評価価値観内省のための教育実践」の分析

研究代表者・研究分担者・連携研究者等が、それぞれ自分自身の教育実践の場（大学・日本語学校・地域日本語教室等）において、「参加者自身が、自らの評価価値観を内省し、見直す」ということを目的とする各種教育実践を行い、そのプロセスを分析した。分析方法としては、「実践プロセスの録音・録画の分析」「事前・事後の PAC 分析インタビュー（内藤 2006）の比較」「学習者のナラティブ（語り）の経時的変化の分析」などの手段が採用された。

内藤哲雄（2006）『PAC 分析実施法入門[改訂版]』ナカニシヤ出版

(3) 新しい「評価価値観内省のためのワークショップ」の立案

上記(1)(2)の研究で得られた知見も踏まえつつ、研究代表者・研究分担者・研究協力者をはじめ、本研究の趣旨に賛同する研究者・教育実践者に広く協力を求め、これまでなかった新しい「評価価値観内省のためのワークショップ」の開催手法をデザインした。

4. 研究成果

本科研費により以下(1)(2)に示す諸研究が行われ、これらの一部は 2016 年にくろしお出版から刊行された書籍『評価を持って街に出よう 「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』（宇佐美洋・編）に収録された。

(1) 縦断的調査

前述のように縦断的調査は、A「ボランティアとしての日本語支援の仕事を始めただけの人」、B「留学生として来日し、その後日本の企業等に就職し、社会人としての生活を始めた人」に対して実施された。

A については、最初は「日本語母語話者として、（日本語があまりよくできない）学習者に対し、『サービス』をしてあげなければ

ならない」という価値観の下、母語話者側が対話の主導権を握り、学習者側に積極的に質問をするなどの言語行動が見られたが、学習者との対話を重ねていくにつれて、自らのそうした一方的対話スタイルを内省的に俯瞰し、それを変えていこうとする意識が生まれてきていること、またそうした意識の変化に当たっては、自らの対話を振り返り、第3者である調査者に語る、という体験が重要な役割を果たしていることが観察された(宇佐美 2014, 以下の引用論文については「5. 主な発表論文等」に掲出)。

Bについては、日本での生活経験を積むとともに、インタビューの中で言及される「評価の対象」が、「(漠然とした)日本人一般」から、「顔の見える、個人としての日本人」へと変わっていくことが観察された。また、母国で培われた価値観に基づいて行動することにより、一種の「空回り感」を感じていた調査協力者が、ある時自分とはまったく異なる価値観の存在に気付き、人間的成長を遂げていくさまが報告された。またその気付きと成長に対し、周囲の日本人との対話がどのように影響していたかが分析された(李 2016 等)。

(2) 「評価価値観内省のための教育実践」の分析

この教育実践とその分析は、C「大学での教授法等の授業」、D「日本語学校での、対話を重視した教育実践」、E「地域日本語教室」等の場で行われた。

Cについては、「よい話し合い」について、個々人がどういうイメージを持っているか、そうしたイメージが、本人のどのような経験によって形成されてきたかが PAC 分析によって検討された。その結果、どういった話し合いを「よい」と認めるかの価値観は、(カリスマ的リーダーに出会うなどして)「話し合いがうまくいった」という経験がそのまま固定している場合と、「話し合いがうまくいかなかった」という経験が「ではどうすればよかったのか」という内省を生み、そこから形成されている場合とがあることが明らかにされた(文野 2016)。

また、外国語教授法のコースの中で、学生の「模擬授業」に対し相互にコメントを書かせる活動を行ったところ、回数を追うごとに授業を評価する観点が広がり、かつその観点での思考が深まりを見せていくというプロセスが示された(林・八木 2016)。

Dについて、研究者と日本語学校の学生との間とで、「評価」をテーマとする「ナラティブ的探究による教育実践」を実施し、そこでの対話が分析された。この分析により、学生自らの「支えとするストーリー」(生きていくうえで本人の支えとなる指針)が、教師や親からの心無い評価コメントによっていったん断ち切れながらも、研究者とともに「評価をめぐる経験」をたどり直す対話を重

ねることによって、学生が「支えとするストーリー」を復権するまでのプロセスを明らかにした(工藤 2016)。

Eについて、地域日本語教室における「生活のための日本語」プログラムにおいて、ポートフォリオを用いて学習者の「自己評価」を促す活動が実践され、そうした実践過程の分析・振り返りから、活動改善のための方策が提言された(金田 2016)。

(3) 新しい「評価価値観内省のためのワークショップ」の立案

(1)(2)の諸研究を書籍『「評価」を持って街に出よう』にまとめていくプロセスにおいて、論文執筆者同士の合議により、「自らの評価価値観の内省する」ということを目的とするワークショップ開催手法を複数デザインした(ワークショップのデザインに当たっては、上記(1)(2)で言及された諸研究で得られた知見等も参考にした)。また2016年1月10日には、『「評価」を持って街に出よう』出版記念シンポジウム*(於:東京大学駒場キャンパス,定員100名)を開催し、このシンポジウムの参加者に対しこれらのワークショップを実施した。このことにより、本研究の成果を実践的活動としての形で社会に還元することができた。

またこのシンポジウム以外にも、各種研修等の場において、研究成果に基づくワークショップを多数実施した。

*<http://kokucheese.com/event/index/359767/>

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計16件)

宇佐美洋 「人間探求のための「評価」、という新しい視点」、『「評価」を持って街に出よう』(書籍), 査読無, 2016, 1-1

森本郁代(連携研究者)・水上悦雄・柳田直美 「話し合いの評価の観点とそれに影響を与える相互行為」、『「評価」を持って街に出よう』(書籍), 査読無, 2016, 18-33

李奎台(研究協力者) 「ある韓国人学習者の価値観に影響を与えた日本での経験」、『「評価」を持って街に出よう』(書籍), 査読無, 2016, 72-86

文野峯子 「「よい話し合い」のイメージはどのように形成されるか」、『「評価」を持って街に出よう』(書籍), 査読無, 2016, 123-138

金田智子 「学習につながる自己評価」、『「評価」を持って街に出よう』(書籍), 査読無, 2016, 140-154

工藤育子(研究協力者) 「学生の価値観を理解する」、『「評価」を持って街に出よう』(書籍), 査読無, 2016, 188-203

林さと子・八木公子 「教師教育における評価活動を通じた学び」、『「評価」を持っ

て街に出よう』(書籍), 査読無, 2016, 204-221

柳田直美 「非母語話者は母語話者の「説明」をどのように評価するか」, 『「評価」を持って街に出よう』(書籍), 査読無, 2016, 291-304

柳田直美 「非母語話者は母語話者の「説明」をどのように評価するか - 母語話者の「説明」に対する第三者評価の分析-」, 『一橋日本語教育研究』, 査読無, 4号, 2016, 51-58

李奎台(研究協力者) 「日本で働く韓国人ヴォーカルトレーナーの教育観の多様化に関する質的研究」, 『国立国語研究所論集』, 査読有, 10号, 2016, 107-133, DOI: 10.15084/00000811

李奎台(研究協力者) 「ある成人韓国人の対人関係に関する価値観の変容 - 振り返りインタビューによる事例研究 -」, 『日本語教育実践研究』(立教日本語教育実践学会), 査読有, 3号, 2016, 137-147

柳田直美 「日本語教育実習における実習生の学びを促す内省プログラムの開発 - 録画資料を積極的に活用した内省プログラムの試案 -」, 『一橋日本語教育研究』, 査読無, 3号, 2015, 13-23

宇佐美洋 「母語話者・非母語話者間の対話における他者への配慮とその評価」, 『第21回プリンストン日本語教育フォーラム プロシーディングズ』, 査読無, (巻号なし), 2014, 163-172

宇佐美洋 「自らの評価価値観を内省するための活動 評価の個別性を尊重するところから始まる新しい教育観」, 『ヨーロッパ日本語教育』, 査読無, 18号, 2014, 199-204

宇佐美洋 「自己と向き合うための評価研究: 個人の能力を伸ばす教育から, コミュニティ全体のパフォーマンスを向上させる教育へ」, 『接触場面における言語使用と言語態度 接触場面の言語管理研究』, 査読無, 11号, 2014, 87-98

森本郁代(連携研究者)・水上悦雄・柳田直美 「留学生による話し合いに対する評価に影響を与えるコミュニケーション行動」, 『総合政策研究』, 査読無, 44号, 2013, 41-53

[学会発表](計19件)

依山雄司・山口昌也・金田智子・森篤嗣 「授業を評価する: FishWatchrによる評価の集約と可視化」, 『「評価」を持って街に出よう』出版記念シンポジウム, 東京大学駒場 キャンパス(東京都目黒区), 2016年1月10日

柳田直美・宇佐美洋 「話し合いが変わる!: 評価を通じて目指すよりよい合意形成」, 『「評価」を持って街に出よう』出版記念シンポジウム, 東京大学駒場 キャンパス(東京都目黒区), 2016年1

月10日

森篤嗣・山口昌也・柳田直美・依山雄司 「話し合いを分析する: FishWatchrによる評価の集約と可視化」, 『「評価」を持って街に出よう』出版記念シンポジウム, 東京大学駒場 キャンパス(東京都目黒区), 2016年1月10日

文野峯子・野原ゆかり・李奎台・道端輝子 「可視化してみよう! 私の教育観の形成と変容」, 『「評価」を持って街に出よう』出版記念シンポジウム, 東京大学駒場 キャンパス(東京都目黒区), 2016年1月10日

鍾水兼貴・福永由佳・三井はるみ・宇佐美洋 「言語変種への評価がもたらすもの」, 『「評価」を持って街に出よう』出版記念シンポジウム, 東京大学駒場 キャンパス(東京都目黒区), 2016年1月10日

柳田直美(協力: 森本郁代) 「話し合い」を評価する - よりよい合意形成のために」, 日本語教育学会 2015年度夏季集中研修ワークショップ - “評価価値観” “会話力”をとらえ直す - (招待講演), 東京大学駒場 キャンパス(東京都目黒区), 2015年8月8-9日

宇佐美洋 「生きることの問い直しとしての「評価」 - 自己と他者を知るための手がかりとして -」, 日本言語文化研究会 第11回コロキウム日本言語文化研究会(政策研究大学院大学・国際交流基金日本語国際センター)(招待講演), 政策研究大学院大学(東京都港区), 2015年7月8日

柳田直美 「母語話者の「説明」に対する非母語話者の評価 - 中級学習者と上級学習者の比較-」, 2015年度日本語教育学会研究集会第4回北海道地区, 北海道教育大学函館校(北海道函館市), 2015年7月2日

宇佐美洋 「「評価」について考える」, 日本語教育学会 2014年度日本語教育研修(夏季集中研修)「教える・学ぶ・考える」(招待講演), 東京大学本郷キャンパス(東京都文京区), 2014年8月9-10日

宇佐美洋 「日本語の能力は1本の物差しで測れるか? - 価値観が多様化する中で, 「評価」について考える-」(招待講演), 平成26年度日本語学校教育研究大会(一般財団法人日本語教育振興協会), 国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区), 2014年8月5日
李奎台(研究協力者) 「ある韓国人成人学習者の日本人に対する評価のあり方の変遷 - 「位置取り」と評価対象に注目して」, シンポジウム 「「評価」を持って街に出よう - ひととひとをつなぐための評価研究-」, 政策研究大学院大学(東京都港区), 2014年2月23日

工藤育子(研究協力者)「『評価』をめぐる語り—日本語学校での「テーマ・ディスカッション」から—」, シンポジウム「『評価』を持って街に出よう—ひととひとをつなぐための評価研究—」, 政策研究大学院大学(東京都港区), 2014年2月23日

文野峯子「よい話し合い」のイメージ—海外交流のグループ会議を例として—」, シンポジウム「『評価』を持って街に出よう—ひととひとをつなぐための評価研究—」, 政策研究大学院大学(東京都港区), 2014年2月23日

柳田直美「外国人は日本人の『説明』をどのように評価するか—『やさしい日本語会話』の評価尺度開発のための予備的調査—」, シンポジウム「『評価』を持って街に出よう—ひととひとをつなぐための評価研究—」, 政策研究大学院大学(東京都港区), 2014年2月23日

金田智子・藤川美穂・張文宜・瀬戸彩子・地引愛「学習につながる自己評価—『生活のための日本語』を学ぶ場での実践—」, シンポジウム「『評価』を持って街に出よう—ひととひとをつなぐための評価研究—」, 政策研究大学院大学(東京都港区), 2014年2月23日

森本郁代・水上悦雄・柳田直美「留学生と日本人学生の話し合いにおける両者の評価及び自己評価・他者評価の分析」, シンポジウム「『評価』を持って街に出よう—ひととひとをつなぐための評価研究—」, 政策研究大学院大学(東京都港区), 2014年2月23日

林さと子・八木公子「『日本語教授法』受講学生の評価観を探る」, シンポジウム「『評価』を持って街に出よう—ひととひとをつなぐための評価研究—」, 政策研究大学院大学(東京都港区), 2014年2月23日

宇佐美洋「理解・産出・場・評価—価値観交錯のダイナミズムを読み解く—」, 待遇コミュニケーション学会 2013年秋季大会, 早稲田大学(東京都新宿区), 2013年10月26日

李奎台(研究協力者)「韓国語母語話者の日本語母語話者に対する評価形成に関する質的研究」, 日本語教育学会, 関西外国語大学(大阪府枚方市) 2013年10月13日

〔図書〕(計2件)

宇佐美洋(編)『『評価』を持って街に出よう—『教えたこと・学んだことの評価』という発想を超えて』, くるしお出版, 2016年1月, 359ページ

宇佐美洋『非母語話者の日本語』は、どのように評価されているか—評価プロセスの多様性と普遍性をとらえる試み—』, ココ出版, 2013年2月, 378ページ

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)
取得状況(計0件)

〔その他〕
ホームページ等
<https://www.facebook.com/EvaInDailyLife>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇佐美 洋 (USAMI, Yo)
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号: 40293245

(2) 研究分担者

文野 峯子 (BUNNO, Mineko)
人間環境大学・その他部局等 名誉教授
研究者番号: 10310608

林 さと子 (HAYASHI, Sotoko)
津田塾大学・学芸学部 教授
研究者番号: 50228574

金田 智子 (KANEDA, Tomoko)
学習院大学・文学部 教授
研究者番号: 50304457

柳田 直美 (YANAGIDA, Naomi)
一橋大学・学内共同利用施設等 准教授
研究者番号: 60635291

(3) 連携研究者

森本 郁代 (MORIMOTO, Ikuyo)
関西学院大学・法学部 教授
研究者番号: 40434881

(4) 研究協力者

李 奎台 (LEE, Kyutae)
国立国語研究所 非常勤研究員

工藤 育子 (KUDO, Ikuko)
国立国語研究所 非常勤研究員